

空間から談話へ：前置詞の談話指示用法に関する 認知言語学的考察*

堀内 ふみ野

慶應義塾大学大学院・日本学術振興会

This study examines the discourse-deictic usage of the prepositions *above* and *below*, as in e.g. “as mentioned *above*” and “see *below*”, based on the *British National Corpus*. In it, we demonstrate that these expressions tend to appear in different syntactic patterns/modify different types of words, and their differences reflect the typical structure of written text—i.e. between the preceding and subsequent discourse. The paper then analyzes *above* and *below* from the viewpoint of metaphor, illustrating that the characteristics of the target domain (in this case, discourse) play an important role in determining their distribution.

キーワード： 談話指示、*above/below*、認知言語学、コーパス、メタファー、意味拡張

1. はじめに

英語前置詞の意味については、認知言語学の立場から多くの研究がなされてきた (e.g. Brugman 1981; Lakoff 1987; Dewell 1994; Boers 1996; Tyler and Evans 2003)。これらの研究では、前置詞の意味が物理空間における位置や経路を表す意味から抽象的意味へ拡張するプロセスが注目され、意味間の関連性や拡張の動機づけが示されてきた。

above と *below* も他の多くの前置詞と同様に多義的であり、物理空間における上下を表す用法に加えて、談話 (written discourse) における前方・後方を指す用法 (以下、談

* 本稿の執筆に際し、査読してくださった3名の先生方から数多くの貴重なコメントと建設的なご指摘を頂いた。また、本研究を進める過程で、井上逸兵先生、鈴木亮子先生、大谷直輝先生、野中 大輔氏をはじめ、学内外の多くの先生方や院生諸氏から有益なご指導とご助言を頂いた。記して謝意を表したい。本稿の内容の一部は、日本英語学会第33回大会スチューデント・ワークショップ「意味研究における文脈の役割：認知意味論の新展開」における筆者の口頭発表を基にしている。本稿は JSPS 特別研究員研究奨励費 (課題番号:15J07850) の助成を受けている。本稿における不備や誤りは、全て筆者に帰する。

話指示用法)を持つ。¹

- (1) a. ... the question mentioned *above* / b. ... the picture *above*
(Quirk et al. 1985: 1462)
- (2) a. ... the arguments given *below* / b. The diagrams *below* illustrate ...
(*ibid.*)

(1) の *above* は前方照応、(2) の *below* は後方照応に用いられており、一見すると両者は対称的に使われている。これらはどちらも書き言葉に特有の表現であり、文・ページ・段落といった多様な単位を指示できるなど、多くの共通の特性を持つ (Quirk et al. 1985: 1462; Fillmore 1997: 103-104)。しかし、談話指示用法の *above* と *below* の相違を観察した研究はほとんどなく、生起環境や談話上の機能についても詳細な比較は行われていない。Brugman (1981)、Lakoff (1987)、Tyler and Evans (2003) をはじめ、これまでの前置詞研究の多くは単文単位での作例に基づく研究であり、(1) や (2) の *above/below* のように、談話の構造を考慮して初めて扱えるような用法はそもそもあまり分析されてこなかったと言える。

認知言語学は用法基盤主義 (Langacker 2000) の立場を取り、語や構文の知識はそれが生起する文脈情報を含めた形で蓄えられていると考える。これに基づく、ある言語表現の特性を分析する上では、文法的な生起パターンや共起語、前後の文脈などを含めた実例の生起環境を観察することが重要であると考えられる。また、Langacker (1997: 234) が「話し手が発話の文脈を理解しているからこそ、相互行為や発話内容の決定ができる」と述べているとおり、話し手・書き手による文脈の理解、つまり「談話の流れや聞き手 (読み手) の認知状態を話し手 (書き手) がどう捉えているか」ということ自体が、言語表現の選択に影響を与える重要な要因であると考えられている。

このように、認知言語学は理論的に言語研究における文脈の役割を重視している一方で、実際の分析では談話やコミュニケーションの側面が十分に扱われていないという指摘もなされてきた。例えば、崎田・岡本 (2010: 9) は、従来の認知言語学の研究に対して「用法基盤の原則に基づいて言語使用に注意を払ってきたとはいえ、研究の焦点は伝統的に談話やテキストではなく単一の文や命題に限られてきた」という指摘をした上で、認知語用論という新たなアプローチのもと、認知言語学と語用論の融合を図っている。このアプローチでは、認知とコミュニケーションの相互関係を探求することを柱とし、認知と談話、言語運用の視点を複合的に取り入れた研究が目指されている。山梨 (2004: 70) にお

¹ 本稿では、*above/below* が後ろに補部名詞句を伴う前置詞的用法 (e.g. *above 30° / below 30°*) と、それを伴わない副詞的用法 (e.g. *see above/below*) を包括して「前置詞」と呼ぶ。

いても、「認知言語学の分野の研究は、文法論と意味論に関わる言語現象の研究が中心となっており、広い意味での語用論の研究は本格的にはなされていない」という指摘がなされている。これを踏まえ、本研究では、談話指示用法の *above* と *below* の詳細な比較を通して、認知言語学の枠組みで多数なされてきた前置詞研究をさらに発展させ、単文を超えた談話レベルの構造、および、その背景にある書き手・読み手の認知やコミュニケーションの観点を取り入れて前置詞の振る舞いを分析することを試みる。

なお、語彙の意味研究において、反義性は類義性と並ぶ重要な意味関係の一つとして多く研究されており (e.g. Lyons 1968, 1977; Leech 1974; Cruse 1986)、近年はコーパスにおける生起分布の調査に基づいて反義語を分析した研究も多い (e.g. Charles and Miller 1989; Mettinger 1994; Jones 2002; Gries and Otani 2010)。認知言語学の枠組みでも、語彙間の反義語らしさには程度性があることを指摘した研究や (Croft and Cruse 2004)、反義語に見られる意味的・文法的な非対称性が認知主体の経験や捉え方、外部世界の非対称性の反映であることを論じた研究が見られる (Tyler and Evans 2003; Otani 2007; 大谷ほか 2008; 大谷 2012)。これらの研究は、語彙の意味分析を精緻化する上でも、言語表現の背後にある認知的・経験的基盤を明らかにする上でも、反義語の比較が有効性を持つことを示している。

本稿は、こうした研究を踏襲する形で、反義関係にあるとされる談話指示用法の *above/below* の非対称性を *British National Corpus* における生起分布を基に示す。さらに、その非対称性が生じる動機づけを認知言語学の枠組みから論じる。具体的には、談話指示用法の *above* と *below* では生起する文法構造や修飾対象の語彙に異なる傾向が見られ、その相違は、談話の「上下」が書き手・読み手にとって異なる意味を持つことによって生じていることを主張する。つまり、書き言葉において、先行文脈で述べられた既出の内容を指すことと、まだ述べられていない後続文脈の内容を指すことは質的に異なり、それが *above* と *below* の非対称的振る舞いに反映されていることを多角的・実証的に示す。さらに、*above* と *below* が空間的な位置を表す場合との比較を踏まえ、語彙のメタファー的用法の振る舞いは、メタファー的写像の起点領域 (source domain) の性質のみならず、目標領域 (target domain) が独自に担う性質によっても動機づけられていることを論じる。

本稿の構成を次に示す。まず、2節で前置詞の意味拡張および *above/below* の談話指示用法に関する先行研究を概観し、問題点を指摘する。3節では、本研究で行うコーパス調査の方法を示す。4節と5節で、調査結果の提示と考察を行う。このうち、4節では主に *above/below* が生起する文法構造や生起位置といった形式的な違いを示し、5節では *above/below* の修飾対象の語彙の違いを示す。これらを踏まえ、6節で、語彙のメタファー的意味拡張の研究や前置詞研究一般に対する理論的検討を行う。7節でまとめと今後の課題を述べる。

2. 先行研究

2.1. *above/below* の意味拡張

前節で述べたとおり、英語前置詞の意味拡張についてはこれまでも多数の研究がなされてきた。それらの研究では、各前置詞の意味が中心的意味とされる空間的意味（物理空間における位置や経路を表す意味）からメタファーやメトニミーを介して拡張するプロセスが示されてきた。*above* や *below* についても同様に、物理空間における上下を表す (3) のような用法がメタファーを介して拡張し、(4) のような気温の高低（程度）を表す用法や、今回の分析対象である (5) のような談話指示用法が生じたとされる。²

- (3) He berthed {*above/below*} me. [新編英和活用大辞典]
 (4) The temperature is {*above/below*} 30°. (Quirk et al. 1985: 687)
 (5) See {*above/below*}. [新編英和活用大辞典]

Boers (1996) は、*above/below* の談話指示用法が両者の空間的意味から “TOWARDS THE BEGINNING OF WRITTEN DISCOURSE IS UP; TOWARDS THE END IS DOWN” (Boers 1996: 75) のようなメタファーを介して派生したとしている。さらに、*below* は談話指示用法に拡張するのに対して *under* は同様の意味に拡張しないことを指摘し、その理由を両者が表す空間的意味の特性から説明している。Boers によると、*below* は典型的に「低い位置にあるが、離れていて影響関係にない」位置関係を表すのに対し、*under* は「真下にあり、近接して影響関係にある」位置関係を表す。これを踏まえると、影響を与える・受けるという関係にないテキスト間の関係を表すには *below* の方が適切であるため、*under* ではなく *below* が談話指示用法に拡張したとされる。Boers は上記の説明を *below* に関して行っているが、同様の説明は *above* にも当てはまると考えられる。*above* は典型的に「高い位置にあるが、離れていて影響関係にない」位置関係を表すのに対し、*over* は「真上にあり、近接して影響関係にある」位置関係を表すことが、多くの研究で指摘されている (e.g. Dewell 1994; Boers 1996; Tyler and Evans 2003; Lindstromberg 2010)。この二者においても *over* ではなく *above* のみが談話指示に用いられることから、*above/below* は、物理空間における位置を表す場合に「離れてい

² メタファーは類似性や共起性に基づく領域間の写像であり (Lakoff and Johnson 1980; Lakoff 1987)、前置詞においては一般に、身体的・具体的経験に根ざした物理空間の領域（起点領域、source domain）から非物理的・抽象的な概念領域（目標領域、target domain）へと写像が起こることで、意味が拡張して多義性が生じるとされる。(4) や (5) の *above* や *below* が表す意味も、それぞれ気温や談話といった非物理的な概念領域における意味を表していることから、メタファー的な写像を介して生じた意味（メタファー的意味）と見なされている。

て影響関係にない上下の位置を表す」という意味特性を持つことによって、談話指示用法に拡張したと考えられる。

2.2. 談話指示用法における共通点

次に、談話指示に用いられる際の *above/below* の特性を見ていく。Quirk et al. (1985: 1462) において、談話指示に用いられる *above* と *below* にはさまざまな共通の特性があることが示されている。例えば、両者は共に談話上のさまざまな単位（句、文、段落、ページ、図など）を指すことが可能であり、直前または直後の内容でなくとも指示できる。また、Fillmore (1997: 104) では、両者が使われるレジスターも共通しており、格式ばった書き言葉に特有の表現であることが指摘されている。

さらに、談話指示用法の *above/below* は、後ろに補部名詞句を伴わない形で生起する (Boers 1996: 76)。例えば先に挙げた (1)、(2)、(5) においても、*above* や *below* は補部名詞句を伴っていない。この理由について、Boers は、テキストにおいては *above/below* という表現の生起位置が暗黙的なランドマーク（どこに対する上・下かという基準点）となるため、補部名詞句を伴わずに生起可能であると述べている。

以上のように、先行研究では主に *above* と *below* に見られる共通の特性が指摘され、両者は前方照応・後方照応の表現として対称的に使われると考えられてきた。これらの対称的な側面は、両者が表す空間的意味の対称性 (e.g. (3)) から予測・説明できるものであろう。

2.3. 談話指示用法における相違点と本稿での取り組み

その中で Boers (1996) は、談話指示用法の *above* と *below* の振る舞いに、二つの相違が見られることも指摘している。第一に、談話指示用法の *above* は *below* に比べて使用される頻度が高い。第二に、*above* は *below* が生起できないような文法的地位にも生起可能である。具体的には、(6a) のように名詞を前から修飾することや、(6b) のように *the above* という形式で名詞句のように振る舞うことが可能である。一方、*below* はこれらの文法的地位に生起できない。³

(6) a. The **above** statement / b. From the **above** it follows that ...

(Boers 1996: 108)

こうした相違について Boers (1996: 108) は、既出の情報のほうが参照点として使いやすいため、テキスト指示においては *above* の方が一般的なのだろうと説明している。

³ これらの文法的相違については、Quirk et al. (1985: 1462) も参照のこと。

これまでの前置詞のメタファー的意味拡張に関する研究は、語彙の物理空間的な意味とメタファー的意味との対応関係に着目することで、意味拡張の動機づけを論じてきた。*above* と *below* の談話指示用法においても、2.1 節で示したように、物理空間における「上」と談話の「先行文脈」、「下」と談話の「後続文脈」との対応関係が主に指摘されてきたと言える。前置詞のメタファー的意味はあくまで基本義とされる空間の意味に基づいて説明される傾向にあり、メタファー的意味の特性を論じる際も、その前置詞の空間の意味との類似性が強調されてきた。一方で、本節に挙げた Boers (1996) の指摘は、*above/below* の非対称性が、物理的な上下ではなく談話における「上下」(先行文脈と後続文脈)の意味づけの相違によって生じていることを示唆する。つまり、談話指示用法の *above* と *below* が非対称的に振る舞うことは、両前置詞が表す物理的な上下の位置から直接的に説明できるものではなく、談話の構造や、その背景に存在する書き手・読み手を考慮して初めて捉えられるものであると思われる。この現象は、前置詞のメタファー的意味を空間の意味からの派生や拡張として捉え、空間の意味との類似性を基に説明してきた従来の分析に対し、問題を投げかけるものであろう。

このように、Boers の指摘は重要な示唆を含んでいるものの、Boers は前方照応のほうが一般的であるという言及をすることとどまり、談話の構造や書き手・読み手の認知状態と、*above/below* の文法的振る舞いの相違との対応関係を詳細に記述・分析しているわけではない。Horiuchi (2016) は、コーパス言語学のコロケーション分析の手法を用いて *above/below* はそれぞれ共起強度の高い語彙が異なるという調査結果を示しており、前方照応と後方照応の間には、どちらか一般的かという説明だけでは集約できない多様な意味的・機能的な相違があることが示唆される。しかし、いずれにおいても両者の相違は部分的にしか記述されておらず、また、語彙の意味拡張や前置詞研究一般を視野に入れた理論的考察には至っていない。本稿では、これらの研究をさらに発展させ、談話指示用法の *above/below* の振る舞いに見られる相違を、実例が生起する文法構造や生起位置の相違を含めて網羅的・実証的に示すことを試みる。さらに、認知言語学の枠組みに基づいてその相違が生じる動機づけを考察し、前置詞のメタファー的意味拡張の研究に対する理論的な示唆について検討する。

3. データと調査方法

3.1. データの抽出

本研究では、1 億語規模のイギリス英語のコーパスである *British National Corpus* (*BNC*) を用いて調査を行った。*BNC* は書き言葉が約 9 割、話し言葉が約 1 割の構成であり、今回のような書き言葉で使われる表現の分析に適している。今回の調査では、小学館コーパスネットワークを介して *BNC* にアクセスし、*above*、*below* の全用例 (*above* :

25,176 例、*below* : 14,103 例) を品詞を指定せずに検索した。その中から、*above* と *below* の用例 1,000 例ずつをランダムサンプリングによって抽出した。こうして得られた合計 2,000 例のデータをすべて観察し、*above/below* が表す意味を以下のいずれかに手作業で分類した。

- A) 空間 (上・下) (e.g. He berthed {*above/below*} me.)
- B) 程度 (以上・以下) (e.g. The temperature is {*above/below*} 30°.)
- C) 談話指示 (上記・下記) (e.g. See {*above/below*}.)
- D) その他 (e.g. *Above* all, keep in touch.)

今回の調査では、物理空間における上下を表す用法を「A. 空間」とし、同じ紙面上にある情報を指している用法は、指示対象が文章である場合も図表や写真である場合もすべて「C. 談話指示」に含めた。

その結果、各意味に分類された用例数と割合 (%) は、表 1 のとおりであった。

表 1 : *above/below* の意味の分布

	A. 空間		B. 程度		C. 談話指示 ⁴		D. その他 ⁵		合計	
<i>above</i>	395	39.5%	124	12.4%	306	30.6%	175	17.5%	1,000	100%
<i>below</i>	426	42.6%	212	21.2%	328	32.8%	34	3.4%	1,000	100%

本稿では、このうち「C. 談話指示」に分類された *above* の 306 例、*below* の 328 例を分析の対象とし、より詳しい調査を行った。次節で、これらの事例に対して行ったコーディングについて説明する。

3.2. コーディングの観点

本稿では、談話指示に用いられる *above/below* の生起環境を文法構造 (形式的特性) と修飾対象の語彙の観点からコーディングし、該当する事例数を集計した。コーディングの観点を次に示す。

⁴ 表 1 のとおり、抽出した 1,000 例を見ると、*above/below* はどちらも約 3 割ずつ談話指示用法で生起している。これは一見すると、2.3 節で挙げた「談話指示用法の *above* は *below* に比べて使用される頻度が高い」という Boers (1996) の指摘と合わないとも見える。しかし、そもそも *above* のほうが BNC 全体での生起頻度が高いため (*above*: 25,176 例、*below*: 14,103 例)、同じ 3 割であっても BNC 全体としては Boers の指摘どおり *above* の談話指示用法のほうが生起頻度が高いと言える。

⁵ *above all* という表現の生起頻度が高いため、*above* のほうが「D. その他」の事例数が多い。

表 2：コーディングの観点

A. 文法構造 (形式的特性)	
(i)	名詞修飾・動詞修飾： <i>above/below</i> の直接の修飾対象が、名詞か動詞か。 a. 名詞修飾 (e.g. the <u>picture</u> <i>above</i> / The <u>diagrams</u> <i>below</i> illustrate ...) b. 動詞修飾 (e.g. the question mentioned <i>above</i> / See <i>below</i>) c. その他 (e.g. From the <i>above</i> it follows that ...)
(ii)	主語・目的語： <i>above/below</i> が名詞修飾となる際、両者が含まれる名詞句が主語か目的語か。 a. 主語 (e.g. The diagram <i>above</i> sketches this concept) b. 目的語 (e.g. See page 42 <i>below</i> .)
(iii)	生起位置： <i>above/below</i> が含まれる節や句が、主節前に前置されているかどうか。 ⁶ a. 主節前 (e.g. <u>In the context</u> <i>above</i> , Mr. Lorry did not ... / <u>As explained</u> <i>above</i> , some students ...) b. それ以外
B. 修飾対象の語彙	
	名詞修飾の場合、修飾対象の名詞が何か。(e.g. the <u>picture</u> <i>above</i> → <i>picture</i>) 動詞修飾の場合、修飾対象の動詞が何か。(e.g. <u>See</u> <i>below</i> → <i>see</i>)

「A. 文法構造」については、まず、*above/below* が修飾している語彙の品詞を一例ずつ調査した。本研究が依拠する認知言語学の枠組みでは、統語論の自律性が否定され、言語形式の違いは意味の違いを反映していると考えられている (Langacker 1987, 2008)。これに基づくと、*above* による先行文脈の指示と *below* による後続文脈の指示とが意味的・機能的な相違を持つ場合、両者が生起する統語的な構造にも相違が生じることが予想される。そのため、本研究ではまず *above/below* が修飾する語彙の品詞を見ていくことで、両者が生起しやすい統語的な構造を調査した。⁷ さらに、4 節で詳しく論じるが、言語表現の生起位置は談話における情報構造や機能と相関関係を持つとされる。談話の構造を考慮すると、テキスト内に既出の情報を指す *above* は、先行文脈に近い位置に生起しやすいことが予想される。そのため、本研究ではまず、*above/below* が含まれる名詞句の文法的地位 (主語・目的語) をコーディングすることで、それらの動詞に対する生起位置の

⁶ 今回の調査では、*above/below* が副詞節や前置詞句内に含まれ、かつ、主節前に前置されている用例のみを「a. 主節前」として集計した。それらが主節の後ろに生起している例や、そもそも *above/below* が副詞節や前置詞句内に含まれない例は、すべて「b. それ以外」とした。

⁷ 生起環境から語彙の特性を捉える手法は「語彙の特性は共起語によって明らかにしうる」(Firth 1957: 11) というコーパス言語学の考え方も通じる。

分布を調査した。さらに、*above/below* が含まれる副詞節や前置詞句の、主節に対する生起位置も併せて調査した。

また、「B. 修飾対象の語彙」では、*above/below* が修飾する名詞および動詞を観察した。*above/below* の談話指示用法において、修飾対象の語彙の相違は、*above/below* の指示対象の相違、つまり両者がそれぞれ談話上のどういった要素を指示する際に用いられやすいかの傾向を反映していると考えられる。本研究では、抽出した談話指示用法の実例を一例ずつ観察し、*above/below* が修飾しやすい語彙の相違を、両者が生起する文法的なパターンや生起位置の分布と併せて包括的に記述・説明することを試みた。

以降で、コーディングの結果について説明し、考察を行う。まず、4節で *above/below* が生起する文法構造の調査結果を示し、5節で修飾対象の語彙の調査結果を示す。

4. 文法構造の相違

4.1. 調査結果 1：修飾対象の品詞

はじめに、*above/below* が修飾している語彙の品詞を調査した結果を表3に示す。⁸

表3：*above/below* の修飾対象の品詞

		<i>above</i>		<i>below</i>	
a	名詞修飾 (e.g. the <u>picture</u> <i>above</i>)	133	43.5%	109	33.2%
b	動詞修飾 (e.g. <u>see</u> <i>below</i>)	161	52.6%	210	64.0%
c	その他	12	3.9%	9	2.7%
合計		306	100%	328	100%

above については、名詞修飾が133例(43.5%)、動詞修飾が161例(52.6%)と、動詞修飾の用例がやや多いものの、両者が約半数ずつ観察された。以下の(7)は *above* が名詞を修飾している例、(8)は動詞を修飾している例である。以降で出典表記の無い例はすべて *BNC* から抽出した実例である。

- (7) a. The diagram *above* sketches this concept.
 b. In addition to the *above* problem, I discovered another. Looking beneath the carriage, I noticed that there was a machine needle caught and laying flat across the magnets.

⁸ 本稿の表3から表7に示した *above/below* の頻度分布に対してカイ二乗検定を行ったところ、すべてにおいて有意差 ($p < .05$) が見られた。

- (8) a. Many of the needs described **above** require the involvement of a school staff who have an understanding of and commitment to the benefits of linking with the world beyond school.
- b. As explained **above**, English recognizes a distinction between one and more than one (singular and plural). This distinction has to be expressed morphologically, by adding a suffix to a noun or by changing its form in some other way to indicate whether it refers to one or more than one: student/students, fox/foxes, man/men, child/children.

一方、*below* は名詞修飾が 109 例 (33.2%) であるのに対し、動詞修飾が 210 例 (64.0%) と、*above* に比べて動詞を修飾する割合が大きい。(9) は *below* が名詞を、(10) は動詞を修飾する例である。

- (9) a. If you follow the guidelines **below** your complaint will be dealt with in the most efficient manner possible.
- b. The method of issue is described in detail in Chapter 5 **below**.
- (10) a. Reality Orientation activities (see **below**) are helpful to keep the brain working ...
- b. This issue will be discussed further **below**.

なお、Quirk et al. (1985: 1462) や Boers (1996: 108) の指摘どおり、*above* には名詞を前から修飾する例 (e.g. (7b)) が 70 例見られたが、*below* にはそうした例は見られなかった。

さらに、*above* と *below* の用例を細かく見ると、両者の生起環境には「名詞を修飾するか動詞を修飾するか」という以上の相違が見られる。例えば (8) と (10) は共に動詞修飾の例だが、(8a) では主要部である *described* が過去分詞形で名詞句 (*the needs*) を修飾している。一方で、(10) では *below* が命令文 (*see below*) や受身文 (... *be discussed further below*) の述部に生起している。これを踏まえ、より細かい粒度で両者が生起する文法構造を調べたところ、以下の分布が見られた。

表 4 : *above/below* が生起する文法構造

		<i>above</i>		<i>below</i>		
a	名詞修飾 (e.g. the <i>above</i> analysis)	133	43.5%	109	33.2%	
b	名詞 + 分詞 (e.g. the reasons stated <i>above</i>)	96	31.4%	45	13.7%	
c		as + 分詞 (e.g. as mentioned <i>above</i> , ...)	30	9.8%	13	4.0%
d		動詞修飾 能動 (e.g. we show <i>below</i>)	12	3.9%	7	2.1%
e	動詞修飾 命令 (e.g. See <i>below</i> .)	19	6.2%	74	22.6%	
f		受身 (e.g. ... is listed <i>below</i> .)	4	1.3%	71	21.6%
g	その他 (e.g. <i>Below</i> we explain how ...)	12	3.9%	9	2.7%	
合計		306	100%	328	100%	

この分布を見ると、両者が生起しやすい文法構造の差がより顕著であろう。*above* は動詞修飾となる場合にも (8a) *many of the needs described above* のような「b. 名詞 + 分詞」型で生起する割合が大きいの (96 例、31.4%)。この場合、*above* が直接修飾している対象が動詞でも、その動詞は過去分詞形で名詞句を修飾し、全体の構造としては *above* が名詞句の内部に含まれている。一方の *below* は、動詞修飾の場合にも (10) のように「e. 命令」(74 例、22.6%) または「f. 受身」(71 例、21.6%) の文の述部に生起する頻度が高い。表 4 の結果から、*above* は「a. 名詞修飾」や「b. 名詞 + 分詞」の形で名詞句の内部に生起しやすいのに対し、*below* は動詞句の内部 (述部) に生起しやすい傾向が見取れる。

4.2. 調査結果 2 : 名詞句の文法的地位

次に、*above/below* が名詞修飾になる用例 (*above*: 133 例、*below* 109 例) を対象に、*above/below* が含まれる名詞句が主語として生起するか、動詞の目的語として生起するかを調査した。なお、対象の名詞句は動詞の項であるとは限らず、付加詞である前置詞句の補部として生起している例 (e.g. *in the context above*) も多く見られた。前置詞句については生起位置の観点から別途調査しているため (結果は 4.3 節参照)、ここでは名詞句が動詞の項となる事例に絞って調査を行った。動詞の項となるのは、*above* が含まれる名詞句のうち 70 例、*below* が含まれる名詞句のうち 66 例であり、いずれも主語または他動詞の目的語位置に生起していた。名詞句の文法的地位をコーディングした結果を次に示す。

表 5 : *above/below* を含む名詞句の文法的地位 (主語・目的語)

		<i>above</i>		<i>below</i>	
a	主語 (e.g. <u>The diagram <i>above</i> sketches ...</u>)	40	57.1%	16	24.2%
b	目的語 (e.g. See <u>page 42 <i>below</i></u>)	30	42.9%	50	75.8%
合計		70	100%	66	100%

このように、*above* は主語名詞句内に生起する例 (e.g. (7a)) が 40 例で全体の 57.1% であるのに対し、*below* は目的語名詞句内に生起する例 (e.g. (9a)) が 50 例で、全体の 75.8% という高い割合を占めていた。

4.3. 調査結果 3 : 生起位置

さらに、*above/below* が副詞節や前置詞句内に含まれ、かつ、その節や句が主節前に生起している用例 (e.g. (7b), (8b)) の数を調査した。その結果、表 6 のとおり、*above* の場合は 46 例 (15.0%) が主節前に生起しているのに対し、*below* の場合は主節前に生起する用例が 7 例 (2.1%) のみであり、*below* の場合に比べて *above* を含む節や句のほうが主節前に生起しやすいことがわかった。⁹

表 6 : *above/below* を含む節や句の生起位置

		<i>above</i>		<i>below</i>	
a	主節前 (e.g. <u>In the context <i>above</i>, Mr. Lorry did ...</u>)	46	15.0%	7	2.1%
b	それ以外	260	85.0%	321	97.9%
合計		306	100%	328	100%

以上で見た文法的・形式的な傾向をまとめる。まず、4.1 節で見たとおり、相対的に *above* は名詞句の内部、*below* は動詞句の内部 (特に命令文・受身文の述部) に生起しやすい。また、4.2 節で示したとおり、両者が名詞修飾となる場合、*above* は主語、*below* は目的語の内部に生起しやすい。さらに、4.3 節のとおり、*below* よりも *above* を含む節

⁹ *above* についても、主節前に生起する割合が 15.0% というのは、一見すると少ないようにも見える。しかし、副詞節や前置詞句は前置されない形式が無標であり、Thompson (1985: 57-58) が目的節 1,009 例の生起位置 (主節前・主節後) を調査した結果でも、主節前に生起する割合は 19% であったとされる。注 6 にも示したとおり、本研究では、*above/below* の談話指示用法の全用例 (副詞節・前置詞句内に生起していない例も含む) に対して主節前に生起している割合を示しているため、15.0% という割合は決して低いものではないと考えられる。特に、*below* ではその割合が 2.1% であることを考慮すれば、*above* を含む節や句のほうが前置されやすい傾向が読み取れるであろう。

や句のほうが主節前に前置されやすい。これらを総合すると、*above* のほうが文や節の冒頭近く（主語、または前置された節・句の内部）に生起しやすいのに対し、*below* は文や節の末尾近く（命令文・受身文の述部、目的語の内部）に生起しやすい傾向が見て取れる。

4.4. 文法構造に関する考察

ここで、*above* と *below* の文法的な生起環境に相違が見られる理由を、談話上で *above/below* が指す情報の性質から考えてみたい。*above/below* が指すテキストの「上下」は、物理的・客観的には対称的な位置であっても、テキストの書き手・読み手の視点から見ると対称的ではない。英語のテキストは慣習的に上から下に向かって書かれ、読まれるものである。このため、*above* で指示される範囲、つまり先行文脈の内容はすでに執筆済みであり、読み手にとっても既知の情報（少なくとも、書き手はその前提で談話を続けられるもの）である。一方、*below* で指示される範囲、つまり後続文脈に書かれる内容は未執筆の場合も多く、また、読み手にとっては未知の情報であろう。このように、テキストの「上下」はさまざまな異なる意味合いを有するものであり、それが反義的な語であるはずの *above/below* の文法的振る舞いの相違に反映されている可能性がある。

一般に、語用論的に無標の文においては旧情報が新情報よりも前に生起するとされ、英語では主部に旧情報（主題）、述部に新情報が生起するとされる（cf. Halliday 1967, 1994; 久野 1978; Brown and Yule 1983; 福地 1985; Lambrecht 2000）。旧情報は「話し手によって聞き手が知っている信じられていること」、新情報は「話し手によって聞き手が知らない信じられていること」（Brown and Yule 1983: 154）という定義に基づくと、*above* が指す先行文脈の内容は通常、旧情報に当たると考えられる。このため、*above* を含む節や句は、*below* の場合に比べ、文や節の冒頭近くに生起しやすいのだと考えられる。例えば (11) では、先行文脈ですでに示されている情報が *the above criteria* という形で再提示され、さらなる条件の提示へと談話が繋がれている。

- (11) In addition to the *above criteria* of articulation and recognition of breaches, a further necessary condition must be satisfied: ...

一方、*below* が指しているのは読み手にとって未知の内容であり、後続文脈にその情報が存在すること自体が読み手に知られていない。そのため、*below* は新情報が生起しやすいとされる述部に頻繁に生起すると考えられる。(12) は、受身形の節の述部に *below* が生起する用例である。

- (12) Some common strategies likely to lead to success are listed below:

1. Restrict the locations in which you keep food (there is no need for food in bedrooms, food in your pockets, or in your handbag, for example).

2. Decide on set places or locations to eat (say, the dining room table).
This should prevent certain other locations, like the chair in front of the television, becoming a cue to start eating.
3. Keep a good stock of nutritious foods available: do not ...

下線を引いた節では、*strategies* が後ろに挙げられているということ自体が新情報であり、この節において焦点化されるべき内容である。一方、もし先行文脈に (12) のようなリストがあった場合には、そのリストは読み手にとって既知であるため、述部に *above* が生起する形式 (e.g. *Some common strategies likely to lead to success are listed above.*) で改めてそのリストの存在について述べることは少ないであろう。こうした相違が、*above* は主語名詞句や前置された節・句の内部に生起しやすいのに対し、*below* は述部に生起しやすいという文法的な相違として現れているのではないかと思われる。

同時に、両者の生起位置の違いは類像性 (iconicity) の反映として捉えることが可能である。福地 (1985: 29-30) は、旧情報の生起位置について「前の文に近いほど聴者の記憶の負担が軽いため、旧情報は主語に現れるのが自然である」とし、先行文脈と関連が強い要素を冒頭の主語位置に置くことで、聴者 (読み手) による処理の負荷が軽減されるとしている。また、Thompson (1985)、Ford (1993) らの研究では、副詞的要素の生起位置と談話機能の相関が示されている。例えば Thompson は、主節前に生起する目的節と主節後に生起する目的節を比較し、主節前の目的節のほうが先行文脈との関連性が強いことを指摘している。具体的には、主節前に生起する (13a) の *to cool* は先行文脈から予測される問題を述べており、解決策を提示する主節 (*place the loaf on a wire rack*) へと談話を繋ぐ機能 (text-organizing function) を担っているのに対し、主節後に生起する (13b) の *to cool* は単に主節が表す行為の目的を伝えるのみで、その機能は命題の伝達にとどまるとされる。

- (13) a. To cool, place the loaf on a wire rack.
b. Place the loaf on a wire rack to cool. (Thompson 1985: 55)

これらの研究と、*above/below* が指示する先行文脈・後続文脈の特性を考慮すれば、*above* と *below* の生起位置の相違も自然に捉えられるだろう。つまり書き手は、先行文脈との結びつきが強い *above* を文や節の冒頭近くに、後続文脈との結びつきが強い *below* をそれらの末尾近くに置くことで、読み手によって処理の負荷が低く、書き手にとっても文脈を繋げやすい形で談話を構成・展開していることがわかる。

5. 修飾対象の語彙の相違

次に、*above/below* が修飾する名詞および動詞の性質について見ていく。本研究では、表3の結果で「名詞修飾」に分類された事例については修飾対象の名詞を、「動詞修飾」に分類された事例については修飾対象の動詞を一例ずつ観察した。

5.1. 調査結果 1：名詞の相違

まず、談話指示用法の *above/below* が修飾する名詞のタイプを見る。*above/below* が名詞を修飾している例を以下に再掲する。

- (14) a. The diagram **above** sketches this concept. (= (7a))
 b. In addition to the **above** problem, I discovered another. Looking beneath the carriage, I noticed that there was a machine needle caught and laying flat across the magnets. (= (7b))
- (15) a. If you follow the guidelines **below** your complaint will be dealt with in the most efficient manner possible. (= (9a))
 b. The method of issue is described in detail in Chapter 5 **below**. (= (9b))

このように、修飾対象の名詞自体は各例で異なるものの、これらの名詞はおおまかに次の2タイプに分類することが可能である。¹⁰

- (i) 内容的：議論の内容や情報の種類を表す名詞 (e.g. *problem*, *guidelines*)
 (ii) 形式的：文章構造や図表を表す名詞 (e.g. *diagram*, *Chapter*)

above/below の修飾対象の名詞がそれぞれどちらのタイプかを調査したところ、次の結果が得られた。¹¹

¹⁰ 今回抽出した談話指示用法の *above/below* において、それぞれの修飾対象の名詞を頻度順に並べると、以下の結果であった (括弧内の数値は生起頻度)。

- a. **above** : *para(graph)* (9)、*Chapter/p.* (3)、*sub-section/analysis/example/problem* (2) (頻度1が多数)
 b. **below** : *para(graph)* (7)、*page/p.* (6)、*Chapter* (4)、*section/subsection* (3) (頻度2以下が多数)

このように、生起頻度が3以下の名詞が非常に多く、トークン頻度が上位の語だけを観察しても一般化が困難であった。そのため、本稿では名詞をタイプに分け、その集計結果から分析を行った。

¹¹ 2タイプの区別は必ずしも明白ではないため、「中間例」という区分も設け、両方の特性を有する名詞をここに含めた。例えば *address* は実例の多くが URL を指し、「http://」で始まる特有の形式を持つ。*coupon* も、しばしば図のような形で表されるなど文章とは異なる形式を取りうる。このように、名詞の意味としては内容的でも書き言葉において特有の形式で記載されやすいものは「中間

表 7：修飾対象の名詞のタイプ

	<i>above</i>		<i>below</i>	
(i) 内容的	81	60.9%	27	24.8%
(ii) 形式的	44	33.1%	71	65.1%
中間例	8	6.0%	11	10.1%
合計	133	100%	109	100%

このように、*above* と *below* では修飾しやすい名詞のタイプが大きく異なる。まず、*above* は内容的な名詞を修飾する割合が 60.9% を占めていた。具体的には、*problem*、*question*、*reason*、*analysis*、*method*、*definition*、*example*、*argument*、*relation*、*process*、*assumption*、*condition*、*evidence*、*principle*、*factor* などの語が観察された。

- (16) a. The *above* analysis has demonstrated that, in the absence of price adjustments, DD unemployment can be caused by: ...
 b. The relations *above* may conveniently be written in matrix form ...

(16) において、*above* は、ここで言及されている「分析」や「関係」を読み手に特定化させる役割を担っていると考えられる。一方、*below* は形式的な名詞 (e.g. *paragraph*、*page*、*chapter*、*(sub)section*、*figure*、*table*、*chart*、*diagram*) を修飾する頻度が高く、それが全体の 65.1% を占めていた。

- (17) a. And these reduced payments continue for the next 3 years—as you can see from the chart *below*.
 b. The method of issue is described in detail in Chapter 5 *below*.

(= (9b), (15b))

below は、(17a) では *chart* を、(17b) では *Chapter 5* という具体的な数値を伴う名詞句を修飾している。(17b) の *below* は、第 5 章の方向を示し、かつそれが同一テキスト内の第 5 章であることを示しているものの、読み手は *below* が無くても指示対象の章を容易に特定できるだろう。つまり、(17b) の *below* は指示対象の探索を補助していても、指示対象を一意に決めることにはそれほど貢献していないと思われる。*below* には、(17b) のように、それが無くても指示対象を特定できる名詞句を修飾する例が多く見られた。

5.2. 調査結果 2：動詞の相違

次に、談話指示用法の *above/below* が動詞を修飾する用例を見ていく。*above/below* の修飾対象の動詞を活用形ごとに集計した結果を (18)、(19) に示す。ここでは紙幅の都合上、*above/below* が当該の動詞を修飾する頻度（括弧内の数値）が 3 以上のものを記載する。

(18) ***above***: *described* (12)、*mentioned* (10)、*noted* (5)、*outlined* (4)、*given/quoted/shown/see* (3)

(19) ***below***: *see* (43)、*discussed* (17)、*shown* (11)、*listed* (8)、*described/considered* (5)、*given/summarised* (3)

これを見ると、*above* は、*described*、*mentioned*、*noted*、*outlined*、*quoted* といった、言及や説明に関わる動詞を修飾しやすい。一方、*below* は *see* を修飾する頻度が突出して高いことがわかる。

今回抽出したデータだけでは用例数が少ないため、補助的に、共起の有意性を示す T スコア (cf. Hunston 2002) に基づく調査結果 (Horiuchi 2016) を以下に示す。¹² この調査では、*BNC* の共起検索機能を利用して便宜的に *above/below* の直前 (1 語前) に生起する動詞を活用形で検索し、そのうち T スコアが高い動詞の上位 30 個を抽出している。*above* の結果は表 8 のとおりである。なお、この調査は談話指示用法に絞ったものではなく、表には空間的意味を表す動詞 (e.g. *rise*、*towering*) も含まれるため、談話指示で用いられる動詞に斜体と下線を付与した。

表 8：*above* の直前に生起する動詞 (T スコア順)

	動詞 (1~30 位、() 内は T スコア)
<i>above</i>	<i>described</i> (22.75), <i>mentioned</i> (21.42), <i>see</i> (19.22), <i>outlined</i> (16.10), <i>discussed</i> (15.78), <i>noted</i> (13.54), <i>rise</i> (11.20), <i>listed</i> (11.13), <i>given</i> (10.81), <i>quoted</i> (10.54), <i>shown</i> (9.97), <i>rose</i> (9.46), <i>cited</i> (8.22), <i>pictured</i> (8.18), <i>rising</i> (8.12), <i>indicated</i> (8.07), <i>suggested</i> (8.03), <i>stated</i> (7.82), <i>rises</i> (6.75), <i>raised</i> (6.48) <i>defined</i> (6.39), <i>heard</i> (6.25), <i>seen</i> (6.07), <i>towering</i> (5.91), <i>explained</i> (5.72), <i>hung</i> (5.55), <i>towered</i> (5.38), <i>hanging</i> (5.20), <i>shouted</i> (4.99), <i>presented</i> (4.86)

¹² T スコアはコロケーションの確信度の指標で、その高低によって共起の有意性の強弱が示される。語彙項目の実際の生起頻度と期待値との比較に基づいて算出され、2 以上の場合に有意であるとされる (Hunston 2002: 68-73; 石川 2012: 129)。コロケーション分析については Firth (1957) や Stubbs (2001)、コロケーション分析の手法に基づく *above/below* の比較の詳細は Horiuchi (2016) を参照されたい。

この結果からも、*above* は、言及・説明の様態や粒度を表すさまざまな動詞 (e.g. *described*, *mentioned*, *outlined*, *discussed*, *noted*, *quoted*, *cited*, *indicated*, *suggested*, *stated*, *defined*, *explained*) との共起強度が高いことがわかる。*above* と共に用いられる場合、これらの動詞は過去分詞形で生起しやすい。しかし、表 4 のとおり、これらは典型的に新情報が生起するとされる受身文の述部には生起しづらく、多くの場合、名詞句内部の修飾語句として生起するか (e.g. (20a))、*as* 節の中で用いられる (e.g. (20b))。

- (20) a. The methods described and examples outlined *above* demand a certain amount of expertise on the part of the collaborator. But it is possible to work with people who have had no previous experience of teaching or drama. When working with inexperienced collaborators it is important to brief them carefully, and to use them in simple roles, and perhaps non-speaking roles, ...
- b. As explained *above*, English recognizes a distinction between one and more than one (singular and plural). This distinction has to be expressed morphologically, by adding a suffix to a noun or by changing its form in some other way to indicate whether it refers to one or more than one: student/students, fox/foxes, man/men, child/children. (= (8b))

(20) の例において、*above* が修飾する動詞 (*described*, *outlined*, *explained*) は、指示対象の情報が先行文脈にどういった形で導入されていたかを示している。(20a) では、*the methods described and examples outlined above* という形で既出の情報に触れ、それを主題として示した上で、述部でその主題に対する説明を加えている。さらに、後続文脈ではそれと関連づけながら新たな主張をし、談話を展開している。(20b) でも、先行文脈で説明した内容を再度述べた上で、その詳細を後続文脈で補足している。これらの例では、「言及・説明を表す動詞の過去分詞形 + *above*」の形で読み手に先行文脈の説明を思い出させ、それと関連づけながら後続の談話を展開している。

一方、*below* に関しては T スコアに基づく調査 (Horiuchi 2016) でも *above* とは異なる特徴が観察されている。

表9：below の直前に生起する動詞 (T スコア順)

	動詞 (1~30位、() 内はTスコア)
<i>below</i>	<u>see</u> (31.32), <u>discussed</u> (13.66), <u>described</u> (12.62), <u>listed</u> (12.18), <u>shown</u> (11.97), <u>given</u> (10.98), falls (9.35), fall (9.18), fell (8.22), <u>outlined</u> (7.92), <u>considered</u> (6.42), <u>explained</u> (5.41), <u>summarised</u> (5.19), <u>detailed</u> (4.99), lies (4.80), drop (4.72), living (4.70), falling (4.68), drops (4.67), fallen (4.49), <u>pictured</u> (4.46), <u>reproduced</u> (4.34), <u>mentioned</u> (4.24), <u>indicated</u> (3.94), <u>presented</u> (3.94), <u>examined</u> (3.93), <u>illustrated</u> (3.93), <u>provided</u> (3.82), <u>noted</u> (3.73), <u>seen</u> (3.71)

below については、Tスコアを見ても、*see* のスコアが突出して高い。また、4.1節の表4で「e. 命令」に分類された用例を見ると、主要部の動詞はどれも *see* であった。このことから、「命令形 *see* + *below*」という結び付きが非常に強く、参照指示のための定型的な表現を構成していることが見て取れる。

- (21) a. Reality Orientation activities (see *below*) are helpful to keep the brain working ...
- b. Under its constitution West Germany (like Japan—see *below*) could take no part in external military activities, and by Aug. 20 Chancellor Kohl had apparently accepted that this was a definitive barrier, ...

(21) の例では、参照先の具体的なページ番号や節番号などは指定されておらず、*below* が指す位置はそれほど厳密には示されていない。また、*see below* という表現が括弧内で挿入的に用いられ、それが無くても文が成立する環境で用いられている。これらの例のように、*see below* という表現は、*the above problem* や *the relations above* などに比べ、読み手が対象の記述を実際に探したり特定化したりすることにそれほど寄与していないように思われる。書き手は *see below* という表現で「あとで詳しく述べるため、ここでは詳しく説明しない」ということをメタ的に表しているとも考えられ、当該箇所ですべての議論や詳細な記述をしないことに対して読者に了解を求めていると思われる。こうした例では、*see below* という表現が予告や説明回避の機能を担い、当該箇所での説明が複雑化することを防いでいると考えられる。

see 以外の動詞に目を向けると、*below* は *above* と同様に言及・説明に関わる動詞 (e.g. *discussed*) を修飾するほか、情報の提供方法に関わる動詞 (e.g. *shown*, *listed*, *summarised*) や、思考に関わる *considered* も修飾しやすい。これらの動詞を修飾する事例を見ると、4.1節の表4で示した文法的な生起パターンのおおりに、*below* が受身文の述部に生起する事例が大半を占めていた。これは、*above* が言及・説明の動詞を修飾する際、名詞句内や *as* 節の中に生起しやすいことと対照的である。さらに、その用法は、予告・説明

回避の機能を担うものと、直後に情報を導入するものに大別される。

まず、*see below* と類似した、予告および説明回避の機能を担う事例を見ていく。

- (22) a. These requirements are discussed **below**.
 b. It is not, however, the only method and others are considered **below**.

この例では *discussed*、*considered* といった動詞が受身文の述部に用いられ、後続文脈に関連する情報があることが予告されている。(23) のように、*in more detail*、*further* といった副詞的要素との共起も多く見られることから、これらの表現が詳細な情報をあとで示すことの予告に使われていることがわかる。

- (23) a. Some of the key plants are described in more detail **below**.
 b. He proposed a model which attempted to weight various commodities used by settlers to a greater or lesser degree, including land use, which will be considered further **below**.

次に、*below* が直後に情報を導入する事例を見る。これまでに挙げた予告・説明回避の事例では、*below* によって位置が示されている情報が、*below* から少し離れた位置に生起する傾向にあった。それに対して、(24) は、*below* の直後に指示対象の情報（典型的には、箇条書きやまとめ）が生起している。

- (24) a. Some common strategies likely to lead to success are listed **below**:
 1. Restrict the locations in which you keep food (there is no need for food in bedrooms, food in your pockets, or in your handbag, for example).
 2. Decide on set places or locations to eat (say, the dining room table). This should prevent certain other locations, like the chair in front of the television, becoming a cue to start eating.
 3. Keep a good stock of nutritious foods available: do not ... (= (12))
 b. The eight characteristics of ‘excellence’ are summarised **below**:
 # A bias for action. Managers in excellent companies have a strong preference for doing things rather than analysing situations.
 # Keeping close to the customer. A key factor in these companies’ success is knowing their customers’ preferences. ...

これらの例のように、直後に情報を導入する場合、*below* は「動詞（受身） + *below* + コロン」という型の中で頻繁に生起しており、この型が箇条書きのリストやまとめを導入する一種の定型表現のようにになっている。特に、*shown*、*listed*、*summarised* といった特

定の動詞と共起する場合に、*below*はこの用法になりやすい。一方、今回抽出した例を見ると、*above*には指示対象が直前に生起する例はほとんど見られなかった。このことから、指示対象を直後に導入する用法で頻繁に使われ、その用法を含む定型的なパターンが観察されることは、*below*の特徴の一つと言える。また、(18)、(19)のとおり、*shown*、*listed*、*summarised*は*above*より*below*と共起しやすい動詞である。これらは、言語的説明に特化した*mentioned*や*quoted*に比べ、箇条書きや図表などの導入に使われやすい動詞であろう。*below*がこれらの動詞を修飾しやすく、直後に情報を導入する定型的なパターンを発達させていることは、*below*が情報の形式的側面や図表を表す名詞と共起しやすい傾向 (cf. 5.1 節) とも関連していると思われる。

5.3. 修飾対象の語彙に関する考察

5.1 節、5.2 節で見た *above/below* の相違についても、談話における「上下」の特性から考察を加える。読み手の視点から見ると、*above* が指すのは既知の情報であるため、視覚的にテキスト内を探さなくても記憶から指示対象を探索し、特定することができる。例えば、*the above problem* といった表現を見れば、すでに読んだ情報の中から指示対象である問題 (*problem*) を容易に特定できるであろう。一方、*below* が指す情報は読み手にとって未知であり、記憶の中には入っていない。そのため、指示対象の情報を探索・認識するには、より視覚的で明確な手がかりが必要であることが予想される。これによって、*above* は内容を表す名詞 (e.g. *problem*、*question*、*reason*、*analysis*) を修飾しやすいのに対し、*below* はページ番号や章番号、図表などの形式的な手がかりを含む名詞 (e.g. *Chapter 5*、*chart*、*figure*) や、それらを導入する *shown*、*summarised* などの動詞を修飾する傾向にあるのではないかと考えられる。*below* が内容的な名詞を修飾していた場合、読み手は未読の領域からその内容に応じて指示対象を特定しなくてはならず、認知的負荷が高い。そのため、*below* は内容的な名詞を修飾しづらいのだと考えられる。さらに、*above* は直前ではなく少し離れた位置にある情報を指しやすいのに対して、*below* は (24) のように直後の情報を指す定型的な表現でも生起しやすく、指示対象との距離が近い傾向も見られた。この傾向は、前方照応には *this* と *that* の両方が使えるのに対し、後方照応には *this* しか用いることができないこととも関連していると思われる。こうした指示対象との距離の近さも、先行文脈の情報に比べて後続文脈の情報のほうが探索や認識の負荷が高いことによって生じていると考えられる。

さらに、書き手から見ると通常 *above* という表現が生起する時点で先行文脈は執筆済みのため、その内容について深く議論したのか、概要を述べただけなのか、他の文献を引用したのかも明確であり、それは読み手とも共有されている。一方、*below* という表現が生起するとき、後続文脈の内容は想定はされていても未執筆である場合も多いだろう。そのため、*below* は言及・説明の様態や粒度を詳細に示す動詞 (e.g. *mentioned*、*outlined*、

quoted) より、*shown*、*given* といった抽象度の高い動詞を修飾しやすい可能性がある。

また、後続文脈の内容は読み手にとって未知である一方、書き手はその内容をあらかじめ考えているであろう。そのため、書き手は先回りして読み手の意識を誘導しながら、テキストが読みやすくなるように配慮し、談話を構成していると考えられる。4.1 節で示した文法的分布と併せて考察すると、*below* が読み手を導く命令文や詳細情報の存在を表す受身文 (e.g. ... *is discussed below*) で生起しやすいことは、書き手が後続する内容を予告し、読み手との間にある情報量の差異を埋めながら談話を展開していることの現れであると考えられる。また、直後に情報を導入する表現 (e.g. ... *is listed below*) も、後続する重要な情報へ注意を促し、それらを箇条書きなどで示す際に用いられている (e.g. (24))。ここにも、後続する内容をわかりやすく提示して談話を展開しようとする、書き手の工夫や方略が見て取れる。

以上で見た、談話の先行文脈・後続文脈の相違と *above/below* の振る舞いとの対応を表 10 にまとめる。

表 10：先行文脈・後続文脈の相違と *above/below* の振る舞い

先行文脈	後続文脈		<i>above</i>	<i>below</i>
既知	未知	➔	文法的地位	主語名詞句内 述部、目的語名詞句内
探索が容易	探索しづらい		生起位置	文・節の冒頭近く 文・節の末尾近く
執筆済	未執筆		修飾語(名詞)	内容的 形式的
読み手と共有	書き手だけ把握		修飾語(動詞)	言及・説明の動詞 <i>see</i> の頻度が高い
			指示対象	離れている傾向 直後にも生起

6. 理論的検討

6.1. 前置詞の空間的意味とメタファー的意味の関係

最後に、本稿の分析がこれまでの前置詞研究に対してどのような示唆を持つかを検討する。1 節で述べたとおり、認知意味論の前置詞研究においては、その意味が物理空間的な意味からメタファー的意味へと拡張する動機づけについて多くの分析がなされてきた。これらの研究では、メタファー的写像の起点領域 (source domain) と目標領域 (target domain) の類似性に基づく対応関係が注目されてきたと言える。*above* と *below* についても、「離れていて影響関係にない上下の位置を表す」という空間的意味に基づいて、どちらも談話指示用法に拡張することが指摘されてきた。2.2 節で示したように、談話指示用法の *above/below* に見られる共通性は、両者の空間的意味における対称性を反映していると考えられる。

しかし近年、コーパスに基づくメタファー研究では、語彙がメタファー的意味を表す場

合、字義的な意味を表す場合とは異なる文法的な振る舞いをする傾向が指摘されている。例えば Deignan (2005) は、動物名を表す名詞 (e.g. *dog*, *fox*) が人の行動や性格の領域に拡張したときは、動詞や形容詞への品詞シフトを伴いやすいことを指摘している。動詞として使われる例には *to dog* (狩る) や *to fox* (騙す)、形容詞として使われる例には *foxy* (セクシーな、狡い) などがある。これらの品詞シフトは、一般に人の行動は動詞、性格は形容詞で表されやすいという傾向、つまりメタファーの写像の目標領域である人の行動や性格の領域の特性から生じているとされる。Deignan は、こうした観察結果に基づき、語彙がメタファー的意味を表す場合の生起パターン (文法的振る舞い、共起語など) は、起点領域の構造のみならず、目標領域の構造にも動機づけられている可能性があることを指摘している。

今回分析した *above* と *below* の談話指示用法において、両者の間には多くの非対称性が観察された。しかし、興味深いことに、両者が物理空間的な意味を表す場合には同様の非対称性は見られない。本研究で最初にランダムサンプリングした *above/below* の用例 (各 1,000 例) のうち、空間用法の例 (*above*: 395 例、*below*: 426 例) (cf. 表 1) について修飾対象の品詞を観察すると、*above* は名詞修飾が 58.0% (229 例) で動詞修飾が 29.9% (118 例)、*below* は名詞修飾が 53.3% (227 例) で動詞修飾が 30.0% (128 例) と、*above* と *below* の分布がほぼ同じであった。また、表 8、9 のとおり、空間用法の *above* と共起しやすい動詞は *rise*、*raise*、*tower* といった上への移動を表す動詞、*below* と共起しやすい動詞は *fall* や *drop* といった下への移動を表す動詞であり、この点でも両者は反義語らしい対称的な振る舞いを見せる。

これを踏まえると、*above* と *below* の談話指示用法に見られる非対称性も、両者の空間的意味 (起点領域である空間領域) の性質というよりむしろ、談話の構造、つまり意味拡張した先の目標領域の性質によって生じていると考えられる。談話 (テキスト) の中では、物理的・客観的には対称的であるはずの「上下」が、既知と未知、執筆済みと未執筆といった異なる意味合いを持つ。これによって、情報の探索しやすさや、書き手と読み手が共有している情報量などに差異が生じる。談話指示用法の *above/below* が生起する文法的地位や、両者の文・節における生起位置、修飾対象の語彙に見られる相違は、書き手がこうした差異に配慮しながら談話を構成した結果が反映されたものだと考えられるだろう。このことは、前置詞のメタファー的意味の特性を探る上では、従来想定されてきたような写像の起点領域の性質やそれとの対応関係だけでなく、目標領域 (今回の場合、談話領域) が独自に担う性質を考慮する重要性を示している。実際の言語使用に見られる生起パターン、および、それに基づいて形成される言語知識を明らかにする上では、起点領域からの写像関係のみを過度に重視するのではなく、目標領域の性質がどのように語彙の振る舞いを動機づけているかを深く分析・考察することが必要であろう。

さらに、今回抽出した例のうち、空間用法の *above/below* はそれぞれ約 6 割が補部名

詞句を伴う前置詞的用法で生起していたのに対し、談話指示用法の例はすべて補部名詞句を伴わない副詞的用法で生起していた。これ自体は先行研究での指摘と合致するが (cf. 2.2 節)、Deignan (2005) が示した品詞シフトの観点から見ると、興味深い事実として捉え直すことができる。*above/below* は空間領域では前置詞的にも副詞的にも用いられるが、談話領域では副詞的な使用に限定されており、一種の品詞の転換が見られる。そして、この背景には、書き言葉では *above/below* の生起位置が暗黙のランドマークになるという談話の構造に基づく動機づけがあると考えられる。この事例も、語彙がメタファーの意味を表す場合、その文法的な生起パターンが目標領域の性質によって形作られる側面を持つことを示している。

6.2. 談話・文脈を見る意義

本稿では、これまで認知言語学の枠組みで多く扱われてきた前置詞の振る舞いを、談話や言語使用の観点を取り入れて分析した。1 節で触れたとおり、認知言語学は用法基盤主義の立場を取り、理論的には文脈の役割を重視しているものの、実際の分析対象は単一の文や命題が中心であるという指摘がなされてきた。それに対し、本稿は実例を基に *above/below* の振る舞いを比較し、両者の生起環境にさまざまな相違が見られること、その相違が単文を超えた談話の構造によって動機づけられていることを示した。*above/below* の用法に見られる非対称性は、文章の書き手が談話の流れや読み手の知識状態に配慮しながらテキストを構成・展開していると考えerことで初めて説明できる。本稿の成果は、これまで主にメタファーやメトニミーといった認知プロセスに基づいて説明されてきた多義的な前置詞の振る舞いにも、談話や文脈、書き手と読み手のコミュニケーションといった語用論側面や、実際の言語使用における動的側面が深く関わっていることを示唆する。つまり、崎田・岡本 (2010) が指摘した認知とコミュニケーションの相互関係を重視するアプローチの重要性を、具体的な分析事例を基に示していると言えるだろう。また、本稿は、前置詞の意味やメタファーに関する研究を指示表現や談話構造に関する研究と結び付け、応用した事例としても位置づけることが可能である。本稿で得られた成果は、それぞれの研究分野の知見を融合させ、双方向の発展を促す可能性を持つと言えるだろう。

7. まとめと今後の課題

本稿では、談話指示用法の *above/below* を BNC の実例を基に比較し、両者の文法的な振る舞いや生起環境にさまざまな非対称性が見られること、その非対称性が談話の構造に動機づけられていることを示した。それを基に、前置詞がメタファーの意味を表す場合、その言語的振る舞いのパターンは、メタファー的写像の起点領域だけでなく、目標領域の性質によっても動機づけられていることを論じた。このことは、空間的意味との対応関係

を重視しがちであった前置詞のメタファー的意味に関する研究に対し、目標領域の性質を考慮することの重要性を示している。

認知言語学の前置詞研究においては、特に多義的な *over* に関する研究が多く、*above/below* の振る舞いはそもそも注目されてこなかった。しかし、事例の生起環境を見ると談話指示用法の *above/below* の振る舞いには様々な興味深い特性が見られ、その特性には、情報構造に関わる語用論的な側面、指示対象の探索しやすさに関わる認知的な側面、前置詞の意味拡張の背景にあるメタファーのプロセスといった複数の要因が関わっている。このことは、前置詞のような文法的要素の研究にも、生起文脈や談話、言語使用といった動的な要素を積極的に取り込み、複合的視点から分析を行う重要性を示している。

談話指示の表現には、*above/below* のほか、*earlier/later*、*preceding/following*、*this/that* など多くの表現が見られる。今後の課題としては、(i) 複数の談話指示の表現を比較して各語彙における談話指示の特性を明らかにすると共に、(ii) その特性が生じる動機づけを、各語彙に結びつくほかの用法 (e.g. *earlier/later* が時間を表す用法) との関連から探ることが挙げられる。

参考文献

- Boers, F. 1996. *Spatial Prepositions and Metaphor: A Cognitive Semantic Journey along the UP-DOWN and the FRONT-BACK Dimensions*. Tübingen: Gunter Narr Verlag.
- Brown, G. and G. Yule. 1983. *Discourse Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Brugman, C. M. 1981. *The Story of Over: Polysemy, Semantics and the Structure of the Lexicon*. M.A. Thesis, University of California, Berkeley. Published from New York/London: Garland Press in 1988.
- Charles, W. G. and G. A. Miller. 1989. "Contexts of Antonymous Adjectives." *Applied Psycholinguistics* 10(3): 357-375.
- Croft, W. and D. A. Cruse. 2004. *Cognitive Linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cruse, A. D. 1986. *Lexical Semantics*. Cambridge: Harvard University Press.
- Deignan, A. 2005. *Metaphor and Corpus Linguistics*. Amsterdam: John Benjamins.
- Dewell, R. B. 1994. "Over Again: Image-Schema Transformations in Semantic Analysis." *Cognitive Linguistics* 5(4): 351-380.
- Fillmore, C. J. 1997. *Lectures on Deixis*. Stanford: CSLI Publications.
- Firth, J. R. 1957. *Papers in Linguistics*. Oxford: Oxford University Press.
- Ford, C. E. 1993. *Grammar in Interaction: Adverbial Clauses in American English Conversation*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 福地肇. 1985. 『談話の構造』東京：大修館書店。
- Gries, S. T. and N. Otani. 2010. "Behavioral Profiles: A Corpus-Based Perspective on Synonymy and Antonymy." *ICAME Journal* 34: 121-150.

- Halliday, M. A. K. 1967. "Notes on Transitivity and Theme in English: Part 2." *Journal of Linguistics* 3: 199-244.
- Halliday, M. A. K. 1994. *An Introduction to Functional Grammar*, 2nd edition. London: Arnold.
- Horiuchi, F. 2016. "A Note on *Above* and *Below* for Discourse Reference: From the Perspective of Collocation." *The Geibun-Kenkyu: Journal of Arts and Letters* 110: 255-270.
- Hunston, S. 2002. *Corpora in Applied Linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 石川慎一郎. 2012. 『ベーシックコーパス言語学』東京：ひつじ書房.
- Jones, S. 2002. *Antonymy: A Corpus-Based Perspective*. London/New York: Routledge.
- 久野暉. 1978. 『談話の文法』東京：大修館書店.
- Lakoff, G. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about Mind*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff, G. and M. Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lambrecht, K. 2000. "When Subjects Behave like Objects: An Analysis of the Merging of S and O in Sentence-Focus Construction Across Languages." *Studies in Language* 24-3: 611-682.
- Langacker, R. W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol.1: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, R. W. 1997. "The Contextual Basis of Cognitive Semantic." In J. Nuyts and E. Pederson (eds.), *Language and Conceptualization*, 229-252. Cambridge: Cambridge University Press.
- Langacker, R. W. 2000. "A Dynamic Usage-Based Model." In M. Barlow and S. Kemmer (eds.), *Usage-Based Models of Language*, 1-63. Stanford: CSLI Publications.
- Langacker, R. W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Leech, G. N. 1974. *Semantics*. Harmondsworth: Penguin.
- Lindstromberg, S. 2010. *English Prepositions Explained*, Revised edition. Amsterdam: John Benjamins.
- Lyons, J. 1968. *Introduction to Theoretical Linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lyons, J. 1977. *Semantics*, Vol. 1. Cambridge: Cambridge University Press.
- Mettinger, A. 1994. *Aspects of Semantic Opposition in English*. Oxford: Clarendon Press.
- Otani, N. 2007. "A Cognitive Study of Antonymy: On the Stable Sense of the Particle *Down* in English." *English Linguistics* 24: 445-457.
- 大谷直輝. 2012. 「"John walked *over/under* the bridge" に関する一考察—文法の身体的な基盤と百科事典の意味—」、『言語研究』、141、47-58.
- 大谷直輝・澤田淳・深田智・佐藤博史. 2008. 「言語表現の非対称性とその認知的基盤」、『関西言語学会プロシーディングス』、28、380-384.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of*

the English Language. Essex: Longman.

嶋田智子・岡本雅史. 2010. 『言語運用のダイナミズム』東京：研究社.

Stubbs, M. 2001. *Words and Phrases: Corpus Studies of Lexical Semantics*. Oxford: Blackwell.

Thompson, S. A. 1985. "Grammar and Written Discourse: Initial vs. Final Purpose Clauses in English." *Text* 5(1, 2): 55-84.

Tyler, A. and V. Evans. 2003. *The Semantics of English Prepositions*. Cambridge: Cambridge University Press.

山梨正明. 2004. 『ことばの認知空間』東京：開拓社.